

令和5年度 沖縄県立芸術大学教育研究支援資金事業報告書

土屋 誠一¹⁾

《研究課題》

現代「沖縄美術」の若手美術家に関する、グローバルな視座からの位置づけに関する研究

1. 研究概要

令和5年に開催した「沖縄画（Okinawa-Ga）8人の美術家による、現代沖縄の美術の諸相」展（会場：本学附属図書・芸術資料館、8月10日～8月20日）の開催にあたり、展覧会のドキュメントも含めたカタログを刊行する。カタログ内において、今日の国際的な美術界の動向を踏まえた展覧会の位置づけと意義、出品作家についての各論を述べる、論文を掲載する。そのための、カタログ刊行費用のための助成を求めるものである。

近年、沖縄に拠点を持つ、あるいは沖縄にゆかりのある、概ね30歳前後の、将来を嘱望される美術家が少なからず台頭し始めている。しかしながら、「沖縄」という歴史的・文化的・地理的コンテクストの複雑さもあってか、全国的・世界的な活動展開が十全になされているとは必ずしも言えず、個々の美術家の表現の背景についても、いまだ言説化が不十分である。これは、ひいては、現代沖縄の文化的・社会的な状況についても、理解が行き届いていないことを表している。

展覧会開催に伴う本研究は、出品する美術家（泉川のはな、平良優季、高橋相馬、陳佑而、寺田健人、西永怜央菜、仁添まりな、湯浅要）の作家論・作品論を通じ、現代沖縄が置かれている文化的・社会的コンテクストを明らかにするものである。展覧会は、沖縄に関する美術と、それに伴う現代沖縄の諸問題を明らかにすることで、国内にとどまらず、海外にもその作品群と言説とを流通させ、有為な美術家たちの仕事をグローバルなコンテクストに開くとともに、沖縄以外の、複数あるミクロな文化的共同体との橋掛かりを構築することを目指すものである。そのため、ポストコロニアル研究や、グローバルなモビリティの言説との接合が期待できるし、このような同時代的な文化研究の試みは、こと沖縄にかかわる美術に関するものとしてはほとんど存在してこなかった点に、本研究の新規性がある。

本研究が、展覧会カタログという媒体を通じて、広く伝達されることで、既存の美術史の成果を踏まえつつ、同時代美術においても、例えば沖縄がそうであるような、ローカルなコンテクストをグローバルに開くような、美術研究のモデルケースとなり得るものであ

1) 沖縄県立芸術大学

り、将来的な研究への展開可能性が期待できるものである。

2. 研究期間

令和5年4月1日～令和6年3月31日

3. 研究成果

当初予定していた、イギリスへの巡回展は、諸事情により実現を断念せざるを得ないことになってしまったことが悔やまれる。しかしながら、もともとは、研究報告書的なカタログを刊行し、無償で配布することから転じて、出版元がカタログの製作と流通を引き受けてくれる、一般の書店流通がなされる書籍として販売することが可能になったのは、現代美術の専門家のみならず、幅広い層に書籍が行きわたることが実現できたという点において、より公共性の高い成果物になったという点で、思いがけぬ僥倖であった。刊行されたカタログは、次のとおりである。土屋誠一・富澤ケイ愛理子・町田恵美編『沖縄画（Okinawa-Ga） 8人の美術家による、現代沖縄の美術の諸相』アートダイバー、2023年。

今日、申請者である土屋の過去の研究成果がそうであるように、日本国内のみならず、海外の日本研究者においては、必ずしも英語で論文を書かずとも、それが重要な研究であれば、日本語で書かれた論文であっても、読まれる傾向が強まっている。この背景には、AIによる自動翻訳の精度が向上したというイノベーションも寄与していると考えることができる。そのため、申請者（土屋）の論文が掲載されたカタログが広く行きわたるということは、日本国内に限らず、海外の地域研究のなかでの、沖縄研究にも寄与するものに結実したと、自己評価するものである。詳しくは、上記カタログ所載の論考、土屋誠一「バラバラなるものたちのアソシエーションとしての「沖縄画」」を参照していただきたい。

4. 検証・考察

本研究は、「現代の沖縄にかかわる美術」について、展覧会を通じて、その一側面を明らかにするというアプローチのため、美術史学や芸術学のみならず、現代思想、社会学、文化にかかわる政治学、文化人類学といった、インターディシプリナリーなディスコースによって、分析することが必須であり、展覧会自体のみならず、上述した申請者の論文において、こうしたアプローチが実現できたという点において、現代の沖縄にかかわる美術を語るための、ひとつのモデルケースを提供することに寄与できたと、自己分析するものである。

5. 展望

近年、美術にかかわる研究においては、マイノリティ研究や、ポストコロニアリズム研究、さらにはデコロナイゼーション（脱植民地）研究というコンテキストにおいて、日本国内よりも、むしろ海外での沖縄研究が盛んである。申請者は、沖縄における広義の研究課題を、今後複数展開していくことを計画しており、その橋頭保を構築できたという点において、外部研究資金獲得に接続できる研究実績を積み重ねることができた手ごたえを、強く感じている。そのため、イギリスでの展覧会の実現には至ることができなかったとはいえ、以後、なんらかのかたちで、国際的な共同研究が展開できる可能性を残せたことは、大きな成果であったと思うところである。

加えて、地域研究は言うまでもなく、主題とする当該地域（この場合、沖縄）に、その成果を還元することが肝要であり、展覧会のレビューや、展覧会カタログを踏まえたレビューも複数出版されたため、沖縄に対する注目を惹起することができたという点において、これまで語られてこなかった視点による沖縄像の提案に、一定の成功をしたと考えることができ、地域への公益性も達成できたと考えるものである。

